

# 語義の比喩的発展と定型比喩表現

— 日・英表現の比較 —

門 田 明

## 開 題

Head という英語は本来 **Anterior part of body of animal, upper part of man's body, containing mouth, sense-organs, and brain.** (COD) の意味であるが、同時に **chief** という派生的な意味を持っている。同じ様な現象は日本語にもあって、「かしら(頭)」という語は、「人体の頭部」をいうのにも用いるが、一方「一群の長」という意味にもなる。また日本語で「青天の霹靂」と言い、英語で **"A bolt from the blue"** と言う。いずれも突然に起る変事を言う比喩表現である。

日英語間のこのような一致は、日本語を使う人々と英語を使う人々の間に、類似の発想様式があることを示している。本稿では、類推による語義発展や定型比喩に見られる日英語間の一致・不一致の問題を取上げ、その様相の一端を観察してみたい。

### 1. 類推による意味発展

語の多義化現象の一つに比喩的連想にもとづく語義の発展がある。これは、語が一種の記号として対象している事象の中から、様々の属性が抽象され、他事象との類推から新しい意義がその語に付与されることである。

**It must be printed.**

における **must** から「必要性」という概念が抽象され

**This article is a must.**

に見られる名詞の意味が派生する場合などもこの一例であろう。しかし特にこのような現象が顕著に見られるのは、元来事象の命名から生まれた、名詞・形容詞(形容動詞)・動詞のようないわば名詞性をおびた語である。

たとえば、日本語の名詞「手」は「人体の左右の肩から出た肢」(広辞苑)という第一義のほかに、

- (2) 人体の手のように突き出ているもの。(きゅうりの「手」一蔓をまともせるために立てる竹や木)
- (3) 人体の手のように働くもの。(「手」が足らぬ)
- (4) 手を働かせてすること。(「手」が上がる[技倆])
- (5) てだて。(「手」をつくす[手段])
- (6) しごと。(「手」が明く)
- (7) かかわり合うこと。(「手」を切る[交際])

など、「手」にまつわる種々の連想から、多くの比喩的な意義が生じている。

また形容動詞「綺麗」を見ると(国語新辞典)

- (1) 美しいこと。(きれいな花)
- (2) よごれがないこと。(靴をきれいにする)
- (3) いさぎよいこと。(きれいな態度)
- (4) 残りのないこと。(きれいに忘れた)

のように、視覚的な現象から目に見えない現象にまで連想が及んでいる。

更に、動詞「走る」については(1~7国語新辞典)

- (1) かける。(急に走り出す)
- (2) にげる。(大阪に走ったが、ついにつかまった)
- (3) 速く移動する。(雲が走る)
- (4) 速く流れる。(水が勢よく走っている)
- (5) ほとばしる。(血が走る)
- (6) 引きつけられてその方に傾く。(左翼に走る)
- (7) 度を越えて行く。(感情に走っちゃいけない)
- (8) 通じる。(道は尾根に沿って走っている)
- (9) 感じる。(冷たいものが背筋を走った)

のように動作をあらわす表現から状態をあらわす場合にまで、語義領域がひろがっている。もちろん状態といっても、(6)は愛慕の情から急ぎおもむく心の様子が、(7)は分別なく性急に行なおうとする態度が「走る」という動作との連関を生むのである。

このような語義の発展は英語にもみとめられる。

日本語の「手」「きれい」「走る」に第一義がほぼ対応する。**"hand"** **"beautiful"** **"run"** を取上げ対比してみると、**"hand"** については **"Terminal part of human arm beyond wrist. (COD)"** であって「日本語の「手」と語義領域に多少差異があるが、

- (2) 手の形をしたもの。(the hour hand)
- (3) 働く人として見た「手」。(The work requires many hands.)
- (4) 手並。(She has good hands in cooking.)
- (5) 助力。(to lend a hand)
- (6) 仕事。(to have one's hands full)
- (7) かかわり合うこと。(to have a hand in the business)

(大英和参照)のように、日本語「手」にほとんどその

まま対応するような語義の展開を示している。

次に "beautiful" については

(1) 美しい [Delighting the eye or ear, gratifying any taste. (C O D)]。(a beautiful picture)

(2) りっぱな。(a beautiful specimen)

(3) 実に見上げた。(beautiful patience)

などである。先の日本語の場合と比較して一致点もあるが差異もある。「靴をきれいにする」の「きれいに」は英語で **clean** を用いるであろう。「きれいに忘れた」の「きれいに」は英語では副詞になり、**completely** であって **beautifully** にこの意味はない。

"Run" については英語は非常に多義である。自動詞の意味についてのみ若干拾ろうと (大英和参照)。

(1) かける [(Of men) progress by advancing each foot alternately never having both on ground at once. (Of animals) go quicker than walking pace. (C O D)]。

(2) (感情などに) 走る。(run to sentiment)

(3) 逃亡する。(After the third volley the enemy ran.)

(4) (川・潮) が流れる。(The current is running strong.)

(5) (血液などが) 流れる。(Blood was running from his wound.)

(6) (趣味など) 傾く。(His taste runs to law.)

(7) 通じる。(The road runs along the ridge.)

(8) 感じる。(A cold shiver runs down his spine.)  
など、先の日本語「走る」とかなり似ているものもあるが、

The vine runs along the fence. (はびこる)

The candle runs. (溶けて流れる)

The king's law doesn't run among rebels. (通用する)

などは日本語に見られない用法である。

以上の諸例を瞥見して、一致現象も多いが乖離現象もあらわれることが知られる。このような乖離現象の中には、その比喩的意味の生じた理由が或程度理解出来るようなものもあり、またその推量が困難なものもある。

The king's law doesn't run among rebels.

など、「威令速やかに行きわたる」状態を run と結びつけたのであろう。日本語で「法律が走る」という表現こそ用いないが、その心理は了解できそうである。しかし他動詞 run の表現にうつって "run risks" などになると、日本人には心理的に簡単に受入れ難いものがあるように思える。

この一致、不一致の現象を段階的に観察すると、

(1) 日英語間で語義展開にはほぼ完全な一致が見られるものの。

(2) 一致は見られないが、発想法を理解出来るもの。

(3) 発想法の理解が困難なもの。

にわけることが出来る。

元来比喩的観察というものは主観的要因に左右される度合いが大きいから、(2)に見られるような相違は偶然生じた着眼点の差に起因することもある。一方、文法構造の影響、音声面の影響、風俗習慣の影響など、種々の複雑な背景が考えられる。これらが重なりあうと "as dead as a doornail" の "doornail" のように、全体の意義の中に埋没して、一語としての意義が完全に喪失されるような事態も生じてくる。日英語の間に最も極端な離別現象のあらわれる実例といえよう。

## 2. 定型比喩表現の一致と乖離

比喩的語義の発展で日英語に一致するものがあるということは、両者の比喩的発想法に一致があるということを示している。したがって、句や文の形であらわれる比喩表現に相互に一致するものが出てきても不思議はない。例えば、日本語の「壁に耳あり」という表現に対して、英語の "Walls have ears." という表現がある。前者の出典は「源平盛衰記」に溯るようであり (故事ことわざ辞典 215頁)、後者の初出例は1620年になっている (Oxford Dictionary of Proverbs p.690)。或いは共通の源泉があるのかもしれないが今のところ一応相互に独立して生じたものと考えてよからう。

上例は偶然完全な一致が起ったと思われる例であるが外国語の「ことわざ」「たとえ」に共鳴して、そのままその表現を日本語にとり入れる場合がある。この場合にも完全な表現上の一致が生じる。古くは中国起源のもので実例も多数にのぼるが、西欧起源のものでも、

血は水より濃い Blood is thicker than water.

時は金なり Time is money.

一石二鳥 To kill two birds with one stone.

など、ほとんど完全に日本語に同化したように思える。

以上偶然の一致、相互に交渉があって生じた一致、の別はあるが、形式面に完全な一致がみとめられる場合がある。

次に形式面の完全な一致は見られないが、発想法が類似していて相互にその心理が充分了解できるようなものがある。例えば日本語「瓜二つ」に対応する英語は、"as like as two peas" であるが、相互に「瓜」と "peas" の差はあってもその心理には共通点があり、容易に理解できる。このような実例は他にも多い。

第三に予備知識がなければ理解できないような表現が

ある。例えば "Go to Bath! (=get away)" とか「いざ鎌倉」など、外国語に逐語訳しても無意味なことになる。このような表現の乖離はいろいろな事情によっておこるようである。

先ず、日英語のいずれかに対応関係に立つ語がない場合、このような語を含む表現は理解が困難になる。この一例が上にも見られる固有名詞を含んだ句であろう。固有名詞は、ある意味では一言語の占有物ではなく国境を越えて用いられる語で「リンカーン」「ロンドン」など日本語辞典にも検出語として採録されている。また外来固有名詞といっても、「メッカ(Mecca)」→「あこがれの地」のように普通名詞化が見られるほどに日本語に同化したものもある。が、極めて少数の例外を除いてほとんどが一種の記号的意味を持つだけで、語義の上で自己発展をとげ、しかもそれが永続的に用いられる、というようなことはなかなか起らない。一方固有名詞の普通名詞化は、自国語内部では屢々見られる現象で、それが慣用表現の中にあらわれることも度々である。例えば

*Every Jack must have his Jill.*

など先の "Go to Bath!" 同様直訳では意味をなさない。乖離現象のはなただしい領域に属するものといえよう。もっとも、日本人は、Jack や Jill という語から英米人と同じ心象をつくりはしないが、一つ高い次元に立てば同様の類推形式が存在するわけで、"Jack and Jill" など、わが国の「お鍋、田吾作」などと軌を一にするものといえよう。

固有名詞は類推の不一致が起る顕著な例であるが、普通名詞にもこれに近い例がある。例えば日本語「狸」に対し研究社大和英辞典では "badger" が対応語として示されているのに、大英和辞典 "badger" の項には「あな熊」という訳語が与えられているだけで「狸」という訳語は見当たらない。これは「あな熊」と「狸」が非常に似通った動物で、地方によっては同一視するところもあり、和英辞典で便宜的に「狸」=badger として取扱ったものであろう。厳密に言えば日本語「狸」に対する英語はない。ところで狸は日本人にとってすこぶる親しみのある動物で「狸親父」「狸寝入」「捕らぬ狸の皮算用」など比喩的表現も多い。Badger は英語国民にとって、日本語「狸」ほどの愛好語ではないようで、比喩的意味分化もあまり行われていない。両言語間で実体の把握に懸隔があって理解がむずかしい実例である。この点「狐」"fox" が両言語いずれにおいても狡猾の権化のように考えられているのとは、かなり事情が異っている。一言語圏にだけ特有な事象は、人工のもの自然のものを問わず、先の固有名詞の場合同様、乖離現象を生みだす一つの原因となる。

更に故事伝説等にもとづく表現も、実体把握に懸隔が存在するため乖離現象の生ずる一例となろう。"The seventh heaven" 「蜚雪の功」などこれに属するものといえよう。

上述の諸例は形式よりもむしろ意味の側に問題があって乖離が生じたわけであるが、形式上の変化によって意味把握が困難になるような場合もある。例えば表現の一部が省略されることによって形が変り、論理的な意義把握が困難になるような場合である。"Water under the bridge" は "That which is past and unchangeable" の意味であるが (Whitford and Dixon: Hand book of American Idioms and Idiomatic Usage, p. 150), 日本語に逐語訳しても「橋の下の水」で要領を得ない。これは元来 "Much water has run under the bridge since then." という俚諺があって、その一部分が省略されて生まれた表現であると思われる (cf. Macmillan Book of Proverbs, s.v. water; 英語青年 vol. CIX pp. 558, 689)。原形のままであれば日本人にも共通の感慨はあるが、省略形になるとあまりに簡単に過ぎてわかりにくい。このように、いわば意味とは独立に行なわれる形態上の変化によって再編成された表現は、従来の形でなら容易に判断できたものでも理解困難になる可能性がある。

次に、第一節で扱った比喩的語義と、今第二節で取上げた「ことわざ」など定型比喩表現との間の相関性につき一言したい。定型的比喩表現には先の "as dead as a doornail" の doornail のように、明確な意義を欠く語を含むものがある。このような成句に含まれる語義不明確な語は、一般の語義分類の枠には入らない。その結果、このような語を含む定型比喩もまた普通の語義分類との相関性を失うことになる。辞典もこのような場合、一般の語義分類と切離し一項目を設け、そこに成句を集めることが多いようである。

しかし一方では、比喩的語義発展と密接なつながりを持つ比喩表現も多い。例えば先にも取上げた「血は水よりも濃い」という表現は今日では完全な日本語の比喩表現のように感じられるが、元来は "Blood is thicker than water." に相当する外来表現である。この外来里諺がこれほど日本語に同化されたのは、恐らく日本語の中に既に「血を分ける」「血のつながりがある」など、「血」に血縁をあらわす比喩語義があり、同時に「水」に「水臭い」「水をさす」など疎遠をあらわす比喩語義が存在していたためであろう。この背景があって「血は水よりも濃い」という言葉が日本語の定型比喩として容易に定着しえたのではなかろうか。定型比喩が比喩的語義に持続性を与えるのと逆に、このように比喩的語義が新

しい定型比喩表現を生みだすきっかけとなることもあるように思われる。

さて、以上比喩的語義と定型比喩について大ざっぱな観察を試みたのであるが、以下視野をせばめて、この点をより詳細に観察してみたい。実験的に生活基本語から "water" 「水」をえらび、NEDの分類基準を参考に（従って英語中心的な立場ということになるが）比較対照してみよう。

### 3. Water と 水

金田一春彦著「日本語」の中に、次のような記述がある (p.128)。

「日本語の代表的基本語彙の一つはミズである。日本語のミズは英語の **water** とちがい、その意味はごく狭い。すなわち、それは自然界の地上のものをあらわす点で特色がある。それはツバキ・ナミダ・アセやアメの類を含まない。しかも、…ミズは冷いものを表わしユと対立する。」

古来の日本語について言うとき、この観察は正しいのであろう。しかし現代口語表現について観察してみるとどうであろうか。

**Water**の意味を解説するにあたって NED は先ず

(I) General meanings

(II) H<sub>2</sub>O

(III) A liquid resembling (and usually containing) water

(IV) Appearances resembling water

(V) =Water-colour

(VI) The lap of one shingle in roofing

(VII) Attributive uses

に意味を大別して説明を進めている。更に、動詞 **water** が検出語として別に挙げられているが、本稿では名詞 **water** (I)~(VII)の場合に限って論を進めたい。

さて上の分類によって "water" と「水」の語義を、関係が疎遠に思えるものから順に比較してみよう。

(VI) について見ると、日本語では「屋根板の羽掛」を「水」とはいわない。

(V) についても、日本語では「水彩(画)」を単に「水」とはいわない。

(IV) の場合英語では、(1) (宝石の) 透明度、(2) (織物などの) 波模様をあらわすのに "water" が用いられる。

(I) に関して N E D は [It may have come from Arabic, where this sense of mā', water, is a particular application of the sense 'lustre, splendour'. (e.g. of a sword)] と付記している。

日本語「三尺の秋水」など、この項目に属するものであろう。着想に類似が存在する。

(III) に含まれるのは

(a) An aqueous decoction, infusion, or tincture used medicinally or as a cosmetic or a perfume.

(b) Various watery liquids found in the human or animal body, either normally or in disease.

(c) esp. Urine.

(d) Juice of vegetables.

である。順次検討してみよう。

(a) 厳密には「液」乃至「汁」という語が用いられるところを、日常簡単に「水」ですませることがある。広辞苑「へちま」の項の説明を見ると、

「…その茎から取った水はへちま水といって古来化粧水または咳止めの薬に用いる。」

とある(下線筆者)。複合語として薬品では「昇汞水」「明盤水」「アンモニヤ水」「食塩水」「炭酸水」など化粧品では先の「化粧水」「へちま水」の他に、「香水」「美顔水」など、いずれも語形から推せば水の一種ということになる。

「レモン水」には「レモン油の水溶液」の意味と「レモネード」の二義がある。

(b) 英語では

A dexterous rap on the nose with the key,  
which brought the *water* into his eyes.

To make his mouth *water*.

のように *tears*, *saliva* を *water* で表わす用法である。これに反し日本語では「涙」「唾液」を水と呼ぶことはない。しかし、体液が単に「水」と呼ばれることはある。

「肋膜に水がたまる」という表現では、「水」は漿液をさしている。また複合語として「羊水」「破水」などのほか、「鼻水をたらす」の「鼻水」などもある。

英語で *tears*=*water* となるのは、元来聖書の語法に端を発するようであり、文化の差異が日英語法の差異を生じた一例とも言えよう。

(c) 英語の "to make water" のように、「尿」を単に「水」と呼ぶことは日本語にはないが、「小水」という表現があり、尿を「水」に見立てることはあるといわなければならない。

(d) 複合形式として、先の「へちま水」「レモン水」など、野菜果実の汁を「水」と呼ぶ用例と思うが、一般には果汁については「汁」が用いられ、最近では特に「ジ

ューズ」という外来語をそのまま用い、トマト・ジュース、リンゴ・ジュースなどというのが普通のものである。

以上 "water" と「水」の間で、乖離の顕著と思われる項目から順に観察して来たが、(Ⅱ)は、日英語で語義領域に完全な一致が認められる特殊な場合とってよい。これは「水」が科学的に定義づけられる場合で一種の記号としてその意味が固定されてしまうため起ることである。したがって、この意味では日本語でも、

水は100度で沸騰する。

と、何の抵抗もなく表現されるのであって、「湯」という主観的な語は排除される。

最後に(Ⅰ)の一般的語義と諸属性にもとづく "water" の意味分類を観察しよう。最初に分類の内容を概括的に示してみよう。(NED によるが、分類番号は必ずしも一致しない)

- (1) (a) 一般的意義 (b) 複合語 (c) 「火」に対する物 (d) 上水道の水 (e) 動力 (2) 人間動植物生存の必需品。慰渴物 (3) 薄める作用をするもの (4) 洗浄作用をするもの (5) 鉱泉の水 (6) 海洋・湖沼・河川の水 (7) 水路 (8) 漏水浸水するもの (9) 浮沈現象をおこさせるもの

などで、NED ではこれらに場合に応じて慣用表現が附加されている。以下各項目につき順次検討してみよう。

(1)(a) "water" の一般的な意味を NED は次のように解説している。

The liquid of which seas, lakes and rivers are composed, and which falls as rain and issues from springs. When pure, it is transparent, colourless (except as seen in large quantity, when it has a blue tint), tasteless, and inodorous. Popular language recognizes kinds of 'water' that have not all these negative properties: but (even apart from any scientific knowledge) it has usually been more or less clearly understood that these are really mixtures of water with other substances.

この "water" の定義は一応日本語「水」にそのまま該当するように思われるが、その内容を仔細に検討するとかなりの差異のあることが知られる。

そのもっとも顕著なものは、先にも述べられていた "water" の日本語「水」及び「湯」に対する関係である。英語の "water" は日本語「湯」を含み、日本語「湯」に相当する英語表現は "hot water" 乃至 "warm water" という複合表現であらわされる。Hot water,

warm water, cold water の別は、

Hot water = Water at a high temperature, either naturally as in a hot spring, or artificially heated for cookery, washing, or other purposes.

Warm water = Water heated to a degree considerably below boiling point.

Cold water = Water at its natural temperature which is always many degrees below that of the human body, as opposed to warm or hot water.

とあり、日本語「水」「湯」の区別同様主観的なものである。またこの説明のように "cold water" は "warm water" "hot water" と対比的に用いられるので、日常例えば "I want a drink of water." と言って hot water が与えられることはない。特に上水道の「水」は単に "water" と呼ばれるのが普通で、この限りでは water = cold water が通用すると考えてよい。

また先述のように水 =  $H_2O$  の意味で用いられるような場合には "water" 「水」の間で完全な意義領域の一致が見られ、「水は 100度で沸騰する」という表現が使われる。また、「温水暖房」(広辞苑・玉川百科辞典)という場合の温水は「湯」に相当し、英語 warm water 乃至 hot water に該当する。更に「水で煮る」というような表現は日本語では普通しないが、特別な料理については「水炊」という表現もある。したがって日本語でも湯を水の一つと考える語法が皆無というわけではない。

勿論、大勢としては

water	{	hot water	…湯
		warm water	
		cold water	

の体系が支配的であって "water" 「水」に関する表現を日英対照する場合、注意が必要である。

(b) 次に "hot (warm, cold) water" 以外の複合語について観察してみよう。形式、語義共に日英一致するものも多いので例示すと、fresh water (真水・淡水・清水) hard water (硬水) soft water (軟水) rain water (雨水・天水) salt water (塩水) sea water (海水) snow water (雪水・雪解水) などである。硬水、軟水などの一致は西欧語の逐語訳によるものであろうか。

勿論、日英語間で食違いの起ることも多いのであって例えば "ice water (= iced water)" は日本語「氷水」と必しも一致しない。「氷水」には "iced water"

の意味もあるが、"shaved ice" の意味でこれが用いられることもある。日本語「泉水」は "spring water" ではない。「わき水」「井戸水」がこれに該当する。

"high water" ; "low water" は「満潮」「干潮」と「潮」が用いられる。これは "water" に "tide" の意味があるためである。ただし河、沼などに関しては「高水位」「低水位」が用いられ「高水」「低水」とはならないが、表現に「水」があらわれる。

複合語を形成する能力は英語、日本語とも旺盛であるから、一致不一致の実例は他にもいろいろ見られるであろう。また、現代日本語は様々の点で外来表現の影響を受けているため、西欧語との一致点がますます多くなってゆくことであろう。「水」が体液にまで用いられること。「水は 100度で沸騰する」という表現が通用すること。「温水暖房」など伝統的語法では無理と思われるような表現が存在すること。これらの事実は既存の語の意義領域にまで、西欧表現の影響が浸透してきていることを示しているのではあるまいか。

さて(1) (c)から(9)までの意味のほとんどは、われわれ日本語国民にも「水」に対して何かを想像させるような諸属性をあらわしている。しかし細部を見ると日本語には見られない語義もある。以下 "water" の一般的意義に関して「水」と不一致の起るような点を取り纏めて考察してみよう。

先ず第一に、英語 "water" には複数形 "waters" があり、その場合単数形 "water" と異った特別な意味が付与されることである。日本語の場合複数という文法範疇は皆無にひとしいから、特異な場合として比較対照する必要がある。

複数形 "waters" の意義を列举すると、

- (a) (雅語として) 流動波動現象における水。
- (b) 特定国の領海、特定の水域。(常に複数形)
- (c) 鉱泉水。(屢々複数)
- (d) (古語として) 洪水、大水、積水。
- (e) 羊水。(NEDでは now usually pl. とあるが、

Evans: a Dictionary of contemporary American Usage は "We now speak of it as *the water*, and *waters* is considered old fashioned or dialectal" と説明している)

- (f) "water" が普通名詞化して数が問題となるような場合の "waters" もある。例えば、Wash in two waters and dry. のような場合で "water" は "Each of the quantities of water used successively in a gradual process of washing" の意味になる。このようなものには、他に「織物などの波形模様」、また先にふれた「屋根板の羽掛」があり、いずれも

「波」との連想から生じた語義である。日本語でも「神仏は水波のへだたり」など「水波」の近親性をいう表現はあるが、「波」をそのまま「水たち」という風に複数感覚で捕えることはない。数に対する認識の相違が契機となって生まれた日英語間の乖離現象といえそうである。

以上の諸用法を見て最も重要と思われるのは、(f) のように "water" が普通名詞化して、本来の物質名詞「水」とは全くかけ離れた語義をもつにいたる場合であろう。日本語「水」の語義の中に対応関係に立つ用法が全く無くなってしまからである。

第二に、風俗習慣伝統などの相違からくる語義の差異がある。中でも聖書の語法、キリスト教の習慣との結びつきから来る相違点が "water" 「水」の場合顕著である。元来水と宗教との関係は世界的なもので、神道にも「みそぎ」などあって、キリスト教に限るものではないが、キリスト教はその発生地が砂漠地帯の縁辺であったためか、特に水とのかかわりあい深いようである。したがって聖書の中では「水」という語を使う様々の表現があり、それが英語訳聖書を通じて英語の中には入っている (Funk and Wagnalls: New Standard Bible Dictionary, s.v. water)。先に述べた water = tears もその一例であるが、water of life (what satisfies spiritual needs or desires) なども重要な表現として付加されねばならない。

またキリスト教の儀式「洗礼」に用いられるものとしての "water" の用例も、日本語水との間に差異を生むきっかけを作っている (cf. John 3: 5)。

ただ先にも述べたように神事に水が用いられるのは日本も同様で、これが慣用語に入りこむことは、たとえば「水を向ける」の「水」が、巫女が神寄せをする時にたむけの水をさし向けることに源を発するように、日本語においても見られることである。

なお、日本語にあって英語にない「水」の語義としては、この「水をむける」の他に「水をあける (水上での距離)」「水がはいる (相模用語)」などがある。

以上差異点を中心に "water" 「水」の比較を行ってきたが、"to take water" とか、「水もたまらず切りふせる」などに見られる、"water" 「水」の意味が極めて不明確な場合、"water" が countable に用いられるような場合、日本語で「湯」が "water" に対応する場合、文化の相異による場合などを除けば、その属性把握は日英語間であまり大差ないように思われる。上水道の水を日本人も単に「水」と称し、「水を出しっぱなしにする」などという。稀薄化するのに「水ましする」というような表現を用いる。「一衣帯水」「山高く水長し」

「山紫水明」など漢語的表現に限られるようではあるが海洋、湖沼、河川を「水」で表わす用法もある。「水路」「水上機」「水運」「水行」などの「水」も海洋、湖沼、河川などの水を総称的に言うのである。「旱水」の「水」は洪水の意味である。投身自殺には「入水」という表現があり、"to make a hole in the water" と対応する「宮水」は兵庫県灘地方で酒造に用いる水で鉱泉の水に該当する。等々近似点を数えあげれば際限がないようである。

#### 4. "Water" 及び「水」に関する

##### 定型比喩表現

[a] 日英定型比喩表現の類似

次に "water" 「水」に関する定型比喩表現の対応状態を俚諺辞典の助けを借りて観察しよう。

先ず日英語間で様式にほぼ完全な一致の見られるものがある。それを対照列挙してみよう。

##### 下降性

Water cannot run backward.

水は逆に流れず。

##### 流動性

Water leads itself to its vessel.

水は方円の器に従う。

##### 濃淡

To throw [pour] cold water on.

水をさす。

To put water in one's wine.

濃い中に水をさす。

Blood is thicker than water.

血は水より濃い。

##### 漏水

To put water into a basket.

籠で水汲む。

##### 徒労

To write in water.

Writ (ten) in water. 水に絵を書く。

行く水に数書く。

##### 微力の堆積

Drop by drop, water wears away a stone.

点滴石をうがつ。

Little drops of water, little grains of sand, make the mighty ocean and the pleasure land.

滴積りて渾となる。

##### 大量安価

Like water.

湯水のように

##### 水火

Water afar quencheth not fire.

遠水近火を救わず。

As contrary as fire and water.

水火の争い。

To go through fire and water.

水火を辞せず。

Ships fear fire more than water.

舟には水より火を恐る。

##### 水魚

Like a fish out of water.

魚の水を離れたよう。

Fish in the water are not conscious that they are living in water.

魚の目に水見えず。

To love it no more than a fish loves water.

水魚の交わり。

全く同一の表現については、日英語間に何か交渉があったため生じた一致かどうか問題になる。「血は水より濃い」などは一応外来俚諺の日本語に定着したものと認められているが、他のものについてはどうかであろうか。偶然の一致か、一致の源がたどれるものか。一層の探求が必要となる。

次に形式に完全な一致は見られないが、発想に類似性のあるものがある。必ずしも同義関係に立つわけではないが対照列挙してみよう。

##### 生活必需品

Too much water drowns the miller.

大水に飲水なし。

To draw water to one's mill.

我田引水。

##### 海・湖・川の水

All waters run into the sea.

落ちれば同じ谷川の水。

##### 危険

No safe wading in an unknown water.

河水は狐行を見て渡る。

##### 流動性

Water finds its own level.

堅地に水溜る。

Water under the bridge.

水に流す。

##### 清濁

The more the well is used, the more

water it gives.

せせる小川に水絶えず。

Drawn wells have sweetest water.

流水腐らず。

淀む水には芥たまる。

#### 徒勞

He strives for the moonshine in the water.

水の月取る猿

猿猴が水に澄める月を捕う。

水に映った月の影。

陽炎稲妻水の月。

To cast water into the sea.

川に水運ぶ。

Like water off (on) a duck's back.

蛙の面(背中)に水。

#### 二面性

Water is as dangerous as commodious.

水は人に近うして而も人を溺

らせ(徳は馴れ易うして而も

親しみ難し)。

#### 水路

Where the water is shallow vessel will ride.

A great ship asks deep waters.

舟は水に非ざれば行かず。

#### 水火

As water in a smith's forge that serves  
rather to kindle than quench.

一杯の水を以て車薪の火は救  
い難し。

#### 水魚

In the deepest water is the best fishing.

水広ければ魚大なり。

水積りて魚聚る。

これらを比較して容易に気づくことは、彼我の使用語彙に互いの風俗習慣が顕著に反映していることである。英語では water と関連して smith, mill(er) などが屢々あらわれ、日本語では「水田」が頻繁にあらわれる。一方「蛙の背中に水」"Like water off (on) a duck's back" など「蛙」"duck" をとりかえて「鴨の背中に水」"Like water off (on) a frog's back" としても理解が可能であろう。日本語で「蛙」英語で "duck" が用いられるのは、口調などの問題もあろうが、ほとんど全くの偶然によるものであろう。

(b) 意味による分類

先に "water" 「水」の一般的語義を観察したが、「たとえ」「ことわざ」に用いられる "water" 「水」も特殊の場合を除いて当然この一般的語義の中で分類される。たとえば「籠で水汲む」"To put water into a basket" は漏水現象にもとづく比喩表現である。また、「水をさす」"To put water in one's wine" は、水の物を薄める性質に着眼した「たとえ」である。しかしこのような比喩表現は、比喩を構成する個々の語の語義よりも、比喩全体としての意味が重要である場合が多いので、場合によれば、あえて一般的語義の枠にあてはめない方が適切なこともある。たとえば「我田引水」"To draw water to one's mill" では、NEDの分類基準に従えば、「水」は「灌漑用」「water」は「動力用」としての項目に含まれるべきであろう。日英表現の差違が問題とされる時にはこの分類が便利であるが、上述の比喩の意図は「必需品を専有したがる人心」を画くことにあるので、日英両表現の同一性を問題にする場合には、"water" 「水」の意義は「生活の必需品」という立場に統一して考えるのが便利であろう。また、「湯水のように」"like water" などは「大量安価に入手される」という点が主眼となるので、一般的語義にあてはめ洗浄灌漑用水などの項目を考えることは適切ではない。更に定型比喩の中には「水火」「水魚」のように他の語と不可分の関係で結びつくものが多く、このような連結は、一般語義と切離して取扱う必要があろう。現在一般に使用されている辞典でも、「たとえ」「ことわざ」などは適宜一般語義分類の中で扱ったり、項を別にして扱ったり、時に応じて按配しているようである。

さて意味の上から見て、"water" 「水」が、(1)水火の関係で (2)慰渴物として (3)薄める作用を持つものとして (4)洗浄作用を持つものとして (5)水路の用をなすものとして (6)漏水浸水するものとして、取上げられるような比喩表現を求めることは、日英両語いずれの側でも容易である。そのほか、水のもたらす危険困難("To go through fire and water" 「水火を辞せず」)、必需品でありかつ危険であるという二面性("Water is as dangerous as commodious." 「水は人に近うして而も人を溺らす」)、微力の堆積("Drop by drop, water wears away a stone." 「水滴りて石穿つ」) 流転不帰("Much water goes by the mill that the miller knows not of." 「水の流れに身の行方」) など、日英語国民いずれもが着目しているところである。

先に英語には mill と water を結びつける比喩があり、日本語には稲作に水が関係する比喩があることを言った。これほど著しいものではないが他に日英表現間の



差異として、気付いたものをあげると英語には、 **still water** を特に危険視した比喩がかなりあるが (Beware of a silent dog and still water. Running water is better than standing. etc.) 日本語には特にそのような徴候はみとめられない。日本語には、(中国渡来のものかもしれないが)「水汲み」を特に労苦の代表的なものとして取上げたような比喩がある(「採葉汲水」「薪水の労」等)。また安価無尽蔵に得られる性質から一歩転じて、最低生活をあらわすのに「水」がよく用いられる(「豆を嚙り水を飲みて其の飲を尽す」「菽水の飲」「鎌で水呑む」「疏食を飯い水を飲み」「水腹も一時こたえる」「水呑百姓」)などである。

なお日英両語とも、「徒労」「はかなさ」をあらわす比喩によく **"water"** 「水」が用いられるようである。重複するが参考までに列挙してみよう。

1. To put water into a basket.  
To pour water into a sieve.  
To carry water in a sieve.  
籠で水汲む。  
もんどして水汲む。  
味噌瀧で水を掬う。
2. To cast water into the sea.  
川に水運ぶ。
3. He strives for the moonshine in the water.  
水の月とる猿。  
猿猴が水に澄める月影を捕る。  
水に映った月の影。  
陽炎稲妻水の月。
4. Pour not water on a drowned mouse.  
Like water off (on) a duck's back.  
蛙の面に水。  
蛙の背中に水。
5. To write in water.  
Writ (ten) in [on] water  
水に絵を書く。  
行く水に数かく。
6. To get water from a flint (stone).  
水中に火を求む。
7. As water in a smith's forge that serves rather to kindle than quench.  
一杯の水を以て車薪の火は救い難し。  
焼石に水。

(c) 他語との連関

"Water" 「水」と他語との結びつきで最も顕著なもの

は「水火」「水魚」の関係であろう。

## 水 火

**破壊力** Ships fear fire 舟には水より火を恐る。  
more than water.  
Fire and water 火水になれと攻める。  
have no mercy.  
Water, fire, and  
soldiers, quickly  
make room.

**消火** Water afar quen- 遠水近火を救わず。  
cheth not fire.  
As water in a 一杯の水を以て車薪の  
smith's forge that 火は救い難し。  
serves rather to  
kindle than  
quench.

**反対性** To mix water 水火の争。  
with fire.  
As contrary as 火と水のような中。  
fire and water. 水火器物を一つにせず。  
Fire is love and ※ ※ ※  
water sorrow.  
※ ※ ※ 水中に火を求む。  
To go through 水火を辞せず。  
fire and water. 水火を踏む。

## 水 魚

To love it no 水魚の交わり。  
more than a fish 水と魚。  
loves water.  
Fish in the 魚水中にあって水を知ら  
water are not ず。  
conscious that 魚の目に水見えず(人の  
they are living 目に空見えず)。  
in water.  
Like a fish out 水を離れた魚。  
of watr. 小水の魚。  
In the deepest 水広ければ魚大なり。  
water is the 水積りて魚聚る。  
best fishing.  
Fish mars water, ※ ※ ※  
and flesh mends  
it.  
※ ※ ※ 魚心あれば水心。

上例は該当俚語の一部を示したものであるが、日英語とも、「水火」「水魚」に関する比喩が、他の結びつき

に比し圧倒的に多い。他に英語で "water" と結びつくことの多いものをあげると "sea" "well" "wine" などである。日本語では「田」「湯」など、「水」と結びつくことが多いものである。

更に用例の少ないものをも含め日英俚諺で水と結びつけて用いられている語を列挙すると、

動物	cat, camel, dog, horse	猿
	duck, goose, hen	鶉, 鴨, 燕, 鶏
	fish	魚, 鰻, 鮒 おけら, 蛙, 蜻蛉, 河童, 竜
植物	malt, oat, reed	落花, 蓮花, 大麦, 小麦, 牛蒡
人間	child, genius, miller smith, soldier	年寄, 氣違い
	blood	血
自然	fire, wind, rain, snow	火, 雪, 氷, 海
	spring (season), stone landscape	泉, 川, 波, 土用, 二百十日
建造物	dam, bridge, well, sink (drain), ship, mill	堤, 井戸, 船, 車, 田
	bread, wine, oil, pot, sieve basket, shoe, flint, mortar	飯粒, 酒, 油, 塩辛, 茶, 湯, 瓶, 籠, 味噌瀝桶, 盆, 合羽, 襦袢布

などである。

「河童の水くらい」「竜の水を得るが如し」のように仮空の生物の出てくる比喩表現が日本語には見られるが英語には "water" と結びつくこのような表現は見当たらない。

日英語とも「水油」の関係を取上げる比喩表現はあるが、日本語「水と油」は反撥性をいうのに対して、英語の場合は "To pour oil upon the waters (=to smooth matters over. - Oxford Dictionary of Proverbs)" の如く、波を静める作用に着目する。このように結合している個々の要素は同じであっても、結合の仕方に相違のおこることもある。

### 結 語

さて、実験的意図から、極めて狭い視野に立って、比喩的語義発展と定型比喩表現を日英語で対比し、同一視点に立つものと乖離現象の起る点を眺めてきた。乖離現象の発生源としては、

- (1) 偶然生ずる着眼点の差。
- (2) 風俗・習慣・歴史などの差。
- (3) 言語構造の差。

などが考えられた。(3)については論理的に解明出来るようなものもあり、論理性を越えたいわゆる idiom に属するものもあった。これらの諸点については、今後個々にわたってより広汎に用例を求め検討を加えるべきであろう。

一方、一致点に関して注意を惹かれたのは、日本語の伝統的語義領域に対する外国表現の浸透である。「水」の語義を検討するに際して、若干この角度から語義領域の拡大を感じさせられた。

今一つ問題を感じたのは、西欧風な比喩表現と日本語の伝統的比喩表現（特に中国系比喩表現）との角逐である。例えば「時は金なり (Time is money.)」「一石二鳥 (To kill two birds with one stone.)」などの外来比喩表現に対し、日本語には従来「一刻千金」「一挙兩得」などの伝統的比喩表現がある。同義関係に立つこれらの表現は現在競合して存在しているが、どのような趨勢をたどっているだろうか。他にどのような類例があるのだろうか。

以上のような興味を今後の課題として、本稿を閉じたいと思う。

追記：本稿完成にあたり使用した辞典、参考書の主なものは下記のとおりである。（〔 〕カッコ内は本稿中で用いた略字）。また辞典からの引用については、筆者の考えで適宜省略したり付記したりした箇所のあることをお断わりしておきたい。

The Oxford English Dictionary [NED]

The Concise Oxford Dictionary (5th ed.) [COD]

Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary  
研究社, 昭和35年 [大英和]

Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary  
研究社, 昭和29年 [大和英]

新村出編「広辞苑」岩波書店, 昭和34年

福原麟太郎他編「国語新辞典」研究社, 昭和48年  
[国語新辞典]

Smith & Heseltine: The Oxford Dictionary  
of English Proverbs, (2nd ed.) [Oxford]

Dictionary of Proverbs]

Stevenson : The Macmillan Book of Proverbs,  
Maxims & Famous Phrases, New York, 1965

Tilley, M. P. : A Dictionary of the Proverbs  
in England, Univ. of Michigan Press, 1950

鈴木棠三他編「故事ことわざ辞典」東京堂，昭和31  
年〔故事ことわざ辞典〕

鈴木棠三「続故事ことわざ辞典」東京堂，昭和33年

高橋源一郎「故事成語諺語辞典」明治書院，昭和37

年

小沢愛圀他編「英語諺語辞典」篠崎書林，昭和39年

Funk and Wagnalls : New Standard Bible  
Dictionary, New York, 1936

現代英語教育講座第七巻「日英語の比較」研究社，  
昭和40年

榎垣実 「日本外来語の研究」研究社，昭和38年

金田一春彦「日本語」岩波書店，昭和32年